Japanese Journal of Applied Psychology
1982, No. 7., 33-52

討　論

男性・女性・性差の今日的課題

高　嶋　正　士（共立女子大学）
Masashi TAKASHIMA (Kyoritsu Women's University)

間　宮　　武（共立女子大学）
Takeshi MAMIYA (Kyoritsu Women's University)

柏　木　恵　子（東京女子大学）
Keiko KASHIWAGI (Tokyo Women's Christian University)

武　川　行　男（東京豊島区立文成小学校）
Yukio TAKEKAWA (Bunsei Primary School., Tokyo)

泉　谷　希　光（共立女子大学）
Maremitsu IZUMITANI (Kyoritsu Women's University)

佐　藤　洋　子（朝日新聞社）
Yoko SATO (Asahi Publishing Company)

昭和57年6月12日，本学会の公開シンポジウムが慶応義塾大学三田キャンパスで行なわれた。発言者は上記の通りである。発言者から話題提供後，参加者を交えて活発に討議が行なわれた。本報告は速記録に司会の高嶋が手を入れて整理したものである。

斉藤：慶応の斉藤でございます。本学会では毎年今頃の季節に年中行事の一つとしまして，公開シンポジウムを行ってきていますが，今日は今年の公開シンポジウムでございます。大変暑い中を皆様大勢お集りいただきまして，心からお礼を申し上げます。それでは，司会は高嶋先生がやって下さいますので，只今から司会の方をお願いいたし，会を始めたいと思います。

高嶋(司会)：皆様お暑いところおいでいただきましてありがとうございます。日本応用心理学会では，いま斉藤先生からお話がございましたように，学会の一つの行事として，毎年この6月に公開シンポジウムを行っております。

今年のテーマは常任運営委員会で検討されました結果，特に標題にもございますように，「男性・女性・性差の今日的課題」ということになりまして，私がはからずも運営委員の一人として，オーガナイザーと司会を命ぜられたわけでございます。幸いにもお隣りにおられます間宮先生にそのほとんどお力をおかりして，本日このようなシンポジストによって行うことになったわけでございます。どうぞ，後程に皆様のご意見等もたまわりたいと存じます。

そこで，会の進め方としまして，大体お一人の先生に20分程度お話をうかがいましてから，質疑応答，ディスカッションという形を取りたいと思いますので宜しくお願いいたします。

それでは，簡単に本日のお話をしていただきます先生をご紹介申し上げます。ご案内にありますように，最初に「性差と性教育」という題で共立女子大学教授の間宮武先生にお願いいたします。先生は一昨年まで横浜国立大学の教授であられ，現在は共立女子大の他に日本心理学会常任理事，財団法人日本性教育協会常務理事をなさっておられます。

2番目に「性役割と性差」という題で，東京女子大学教授の柏木恵子先生です。3番目に「教育現場で性差を

どう考えているか」という題で，東京都豊島区立文成小学校教諭の武川行男先生です。先生は東京都の性教育協会のリーダーとしてご活躍されておられます。4番目に「栄養学からみた性差」という題で，共立女子大学教授の泉谷希光先生です。先生は過去4年間にわたって，今夏もおいでになりますが，メキシコで栄養学の面からいろいろな調査を続けておられます。最後に，「婦人問題と性差」という題で，朝日新聞学芸部の佐藤洋子先生です。先生もこういう問題について，いろいろな角度から勉強なされておられます。

以上，本日は諸先生から，いろいろな角度からお話があると思います。では，最初に間宮先生からよろしくお願いいたします。

間宮：こんにちは！間宮でございます。私は「性教育と性差」ということから話題を提供します。いま，ご紹介いただきましたように，私，財団法人日本性教育協会の常務理事をやっておりまして，いろいろ性教育の現代的な問題をとらえておりますが，とくに今日は3つの点を申し上げたいわけでございます。

第1点は，当然性差というものが，性教育とどうかかわるかということ。それから第2点として，従来の性教育に欠けているものとして，特に性度概念を導入したいわけでございます。第3点として，性差からみて性教育の重点としてどういう問題があるか，ということの3点から話題を提供したいと思っております。

その第1点としまして性教育というと，昔はいわゆるsex education という言葉を使っておりましたが，今日は外国でも殆んど使っておりません。Education for human-sexuality（人間の性の教育）という言葉を使い，つまり心理的にも肉体的にも性に比較的ナチュラルな立場にある男児，女児が男性，女性という性的人間に変貌していくことについて，どういうような変貌をさせたらいいのか，ということの教育的な面，これがつまり，今日における性教育という言葉です。そうなりますと，当然そこに性差ということが今日の性教育に導入されてこなければならない点です。ですから，今日の性教育の性格からみて，性差というものを考慮することが非常に大事なことであるということを申し上げたいと思います。

第2点としましては，従来の男性観，女性観というのは，人間を二元的な存在，しかもそれは質的な違いをもつ存在のように考えられてきました。ですから，今までの性教育では男女平等だとか，男女同権だといっても空念仏に終っております。従来は male または female（生物的な男性と女性）は社会的役割に直結させ，male（男），virility（男らしさ），female（女）は womanliness（女性らしさ）に直結して教えちゃったわけですね。外国では male と female という生物的な違いと社会的な意味での virility と womanliness との媒介概念として masculinity（男性度）と femininiity（女性度）とが挿入されて，それぞれの結びつきの仕方の違った男や女が考えられています。例えば女（性別）であるのに男らしい性度をもち，しかし社会から女らしさを期待されているというように。従来は日本の性教育では masculinity と femininity という概念が導入されなかったとし，おろそかにされたために sex difference（性別）というものと，sex discrimination（性差別）ということが混同されがちになってきたわけでございます。

そういう点から男女それぞれをみますと，今日的な傾向としては，性差の縮少化がみられ，平均的にいって男と女の能力や性格が接近化してきています。男の中にも女性度のかなり高いものもいるし，女の中にもかなり男性度の高い女性もいるということになると，必ずしも，男，女とかいったことだけで区別すべきものではないと思います。

そのような性差の縮少化傾向は，体質や性格や知的能力などにもみられますが，性度の変化は性染色体の分裂異常による場合もありますが，それは昔も今もあまり変動がありません。特に今日的傾向としては，両親間の支配関係や父母による養育態度の変化に帰因しています。

武川先生からも，先ほど確めてみましたのですが，最近小学校や中学，高校で女の子が aggressive になってきておりますし，男子が非常にやさしくなってきております。両親の支配関係では，母親の方が非常に強くなってきましたし，子どもにも厳しい態度でのぞんでいるのに，父親は子どもにやさしいということから，性度形成というものがかなりそういうものに影響をうけているのです。ですから，現代の傾向の一つとしては，男性の feminization，女性の masculinization というような男性の女性化傾向，女性の男性化傾向がみられます。資料はもし必要があればあとでおみせしたいと思います。

以上のことは次のような人間の発生や性分化の事情を考えれば，当然理解できるでしょう。人間でも発生の当初は両性的であり，受精から9週間ぐらいになると男性器官になるウオルフ氏管と女性器官になるミューラー氏管とをもち合せています。10週目頃から性染色体の構成如何によって，男性器官又は女性器官がそれぞれ発達していき内性器や外性器を形成していきます。従ってその間に，ホルモン，特にアンドロジェン（男性ホルモン）の影響によって，特に女性体質的な男性，男性体質的な女性になることがあります。性器も男女で見違えるほど変

容することがあります。

世の中には性転換手術をうけるものもいますが，それは男が女に，女が男に転換するわけではなく，出生のときに見違えて女や男に育てられたものが，本来の男や女に戻るわけです。そういったことは発生の当初を考えればありうるわけです。従って従来の性教育では，男の性器，女の性器というようにはっきり異質的に考えて教えましたが，よく考えてみますと，男女とも性腺原茎は同じなんですから，対照的なんですね。ただ機能とか形態が違っているだけなのです。

①性腺原茎の髄質部が男子の精巣へと発達し，皮質部が女子の卵巣へと発達していきます。男子の中腎管（ウオルフ氏管）は精巣上体，精のう，精管を形成するのに対し，女子では消失し，中腎ぼう管（ミューラー氏管）は発達して卵巣・子宮，腟などを形成します。男子では通常の場合中腎ぼう管は消失してしまいます。

②それから特に典型的なのが男性のペニスに対し女性のクリトリス。これはまったく対応したものです。だから女性でも一番性感の敏感なのはクリトリスのはずです。

③それから男性の尿道海綿体に対して女性の小陰唇が対応しています。

女性の小陰唇は左右に分かれていますが，男性の場合はこれはペニスをつつむような形になっています。それから男性の方には陰のうがありますが，女性の方には大陰唇がある。こういうふうに考えてみますと，すべて男女の性器官は対照的で，それぞれに欠けているものがありません。そういう意味では男女平等といえるし，性教育ではこの平等性の理解が大切です。

このように性度とか性器構造という点からみましても，男と女が異質的なものではないといったことが，性教育の中でとりあげられる必要があるわけです。

第3には，異性への対応の仕方という点です。性教育として大事なことは，男女それぞれがどういう対応の仕方をしたらいいかということを教える必要があります。今日の性教育の理念としましては，一つはウィーク・ファースト（弱者優先）ということ。筋力的に強い男が筋力的に弱い女性を優先するというのは，レディ・ファーストというよりも，むしろウィーク・ファーストという観点からとらえていく必要があります。

私は3回スウェーデンに調査にまいりましたけれども，スウェーデンでは，レディ・ファーストとは教えておりません。ウィーク・ファーストすなわち弱い者を優先する。この弱い者とは，大人に対する子供，男に対する女，健常者に対する心身障害者，若い者に対する老人これはいわゆる weak の立場。そうすると，それぞれの比較では相対的なものですが，男の老人と若い女の人だとどっちを優先するかといえば，男の老人の方が男でも弱い。だから，こちらの方が優先ということになります。ですから，いわゆるレディ・ファーストとは少し違うわけですね。それが今日男女という関りあいの一つの大きな原則になります。

それから，もう一つは，男，女の性心理や性生理が違うわけですから，それがどういう風な接し方をするかというところが必要なわけです。それに関しましては，私が常務理事をしております日本性教育協会が総理府の委託により，全国調査を1974年に第1回を，それから7年後の昨年16～21歳を対象に調査しました。その結果初めて性の体験をする時期をみますと，女性では初潮を早くから経験します。そして初潮を経験した後に，異性と交際したいとか，性への関心とか，マスターベーションとか，それから異性の身体にふれたいとか，キス欲とかといったことは，ずっと後になって経験するわけです。

男の場合には，射精を経験する前にすでに性的興奮とか，交際欲とか，性的関心とかを先行して経験します。

デートを初めて経験するのは，男女とも同じ時期です。したがって，男女の性的欲求や性体験の時期的構造が異っているわけです。男子はデートを経験する前にいろいろな性的欲求をあらかじめ経験しているわけです。女性はあまり経験していないのに，デートをするからどうしても男にあおられて接触欲とか性的興奮なんかを開花し，その結果，キスとか，ペッティングや性交などの性行動をだいたい同じ時期に経験します。

だから，初めて経験する時期からいいますと，男の方が心理的な面は非常にはやく経験する。特に性的興奮体験の性差にかかわって性行動の性差が問題になります。そして，行動はほとんど同じ時期に経験する。平均して12歳から男は性的興奮を経験しはじめます。女の子もかなり興奮しはじめますが，なんといっても性的興奮とか性衝動とかいったものは，とにかく思春期からぐっと男の方が強くなる。これは当然，男の生理的緊張状態によります。精液の充溢による内的圧力としての生理的緊張状態が主として男の性的興奮です。女性はそんな生理的状態は経験しないはずです。しかし，女性でも心理的刺激による性的興奮を経験しますが，ひとたび性的興奮状態になると，他の性行動を経験することは女性の方が経験しやすいというのが実態です。性的興奮を初めて経験した時期と他のいろいろな性行動を初めて体験した時期の相関係数を算出してみますと，女性の方が相関係数が高いです。女性の場合には性的興奮をはやく経験した者

は他の性行動をはやく経験する。おそいものはおそくなる。男性の場合は必ず「そうじゃない」ということがいえるわけです。また，例えば性的興奮とキスとの関係を見るとわかりますが，性的興奮の経験のあるものの中では，キスの経験もあるというのは，男よりも女の方が高率です。

これを男女，高校生と大学生に分けてみても，高校の男性28.4%に対して高校の女性45.6%，男子学生の55.5%に対して女子学生は62.3%，だから女性は男とちがった質の性的興奮をしても，やはり性行動にでる可能性とか，そういうものに対する感度とかは女性の方が高いというわけです。男性の方が強烈な性的興奮をしているのにもかかわらず，性行動誘発の感度からみますと，女性の方が，そういった感度が高いということがいえると思います。

以上のように男女の性心理や性生理，さらには性行動の性差から考えますと，今日の性教育として男の見方，接し方，女性の見方，接し方として教える必要があります。どうしてもウィーク・ファーストということや，接し方のマナーということが性教育として重要な課題になってくるのです。

そういった課題をどうしても理解させるのには，今申しましたような，こういった生理的，あるいは心理的な性差というものを理解させるということが必要だということを申し上げたいわけでございます。以上でございます。

柏木：柏木でございます。性役割と性差という題を頂戴しまして，誠に今日的課題というだいそれたものがだされているので，さて何を話してよいものかと思いますが，私は間宮先生と違いまして，もう少し心理学的な性差というものがどのような形ででてくるかという基礎心理学の立場から以前から関心をもっていました。私自身は随分前に研究しましたもので，この頃は休んでいますが，他の方々が集まっていろいろなことをしていらっしゃるものですから，それをまとめて，この問題からどういう風な今日的な課題がでてくるかということを少しお話ししたいと思います。

まず，心理学的な性差というものがある，ということは皆様も大体お認めであるかと思います。大体の心理学的な研究は，子供を使うにしろ，大人を使うにしろ，男女のサンプル両方をとって，まず性差があるかという風なことを検討することからはじまっており，大体の研究では，いろいろな行動において性差があるということを検出しております。

ところがそういう性差を直接扱った研究にしろ，そうじゃないものにしろ，いずれにしても性差がどうであったかというような研究を総合してみますと，意外にもそれほど一般に考えられているほど固定的な形でとらえることが困難のようです。

性差の一覧をみますと，一つはさっき申しましたように，世の中で一般に考えられているほど，それほど明々白々ではないし，それから確定されているものは意外に少ないのです。もう一つは，あるとしてもその性差というものが，いったん決まるとそのままずっと例えば，続くとか，あるいは始めから終りまで一貫してあるというのは本当に少なくて，途中で性差がなくなってしまうものであります。あるいは，初めずっとなかったものが，だんだんできてくるといったものの方が，どちらかというと多いのでございます。同じ文化の中で，ましてや文化が違いますと，性差の現れ方が非常に激しい場合もありますし，少ない場合もあります。まして，同じものが知らぬ間にあらわれるということさえあって，性差というものが本能的に考えればどうかなという風なことの方が多い部分があります。そのことは，いいかえますと，性差というものがあっても，これは今間宮先生がおっしゃったような生理学的な，あるいは身体的に違った生物学的な性差の必然的な結果であるという風に考えるよりも，生まれた後の学習の産物だという風に考える方が妥当ではないかという問題があります。

それから，また特に途中でいろいろ変わる，いったんは，例えば男の子の方が沢山もっていた性格というものが，途中からは女の方になるという変化があることを見ますと，その学習過程というものは非常に複雑で単一的なものではないのではないかという風な可能性が生じます。

そういう点で，私は性役割というものを学習の問題において考えてみると，どのようなことでできるかというようなことを考えたいと思います。

もう一つは性差を総覧してみますと，女性からいうと「男の子の方がこういう特徴をもっているぞ」という風なものの方がどちらかというと多いわけです。これは一体何を意味するのかということは，大変むずかしいけれども，私は概して把握しておりますのは，心理学で問題にするような特性は，心理学で重要だと考えているような人間の特性あるいは性格にしましても，行動にしても，態度にしても，そういうものは少なくとも今の段階では男の人の方に興味があると思われているということです。あるいは，その背景には，それぞれの性に対する期待の違いというものがあります。つまり sex role というものをめぐる価値の問題につきあたるという風に考え

ております。そういうわけで，私は性役割に関しますとか，形成というような問題は性役割の問題ではなくて，もっと広く人間が発達する過程を非常に端的に示す問題であるというように考えております。

つまりどういうことかと申しますと，種をもったものが自然にふくれてきて出てくるというのではなくて，どういう世の中に生を受けたか，あるいは，どういう風な親との出合い，どういう社会の中で，その人がどういう経験をしたかということの産物として，あるいは，その文化や社会や，そこにどういう価値があったかということと密着して形成されてくるものだという風に考えます。

そういう意味で社会的な性役割期待というものが，それぞれの文化や社会の中で，男の人，女の人という性の違いに応じた役割期待，役割規範というものがあって，それを子供が内在化していく。あるいは，いろいろな形で取得していく過程が性役割の形成過程です。これらは，性役割に限ったことではなく，他のいろいろな規範を内在化していく過程と同じであろうと思います。

そこで，性役割の学習過程を，私は今日は次の二つのことをとりあげたいと思います。

一つは先程申しましたように，いろいろな性差は，いろいろな形で変ってくるので，単一の学習の仕方だけを１人の子供がするのではないから，いろいろのことを時期によって，あるいは場合によって組み合わせていくわけですが，一つは子供以外の他人からの働きかけによる学習過程で習得していく部分があると思います。いいかえれば，学習といえるかも知れないし，その中心で一番具体的なものは，親のしつけではないかと思います。

親のしつけは，大体の子供が発達の一番最初から受けますし，それから一つの過程への一番長期にわたっているという意味では，その学習の効果も高く考えられます。

性別しつけにつきましては，先程間宮先生が男の子がだんだん女性化してくいなどとおっしゃいましたが，私は必ずしもそうは思わないのです。それはどういうことかと申しますと，性別しつけというものが，日本には非常に強く存在しているということでございます。今日は資料はもって来ませんでしたが，だいぶ前に，この性別しつけを青年自身がどのくらい受けたか，どういう風な時期にどういう風なものを受けたかということについて調査したことがあります。受けた子供からみて，親が性別しつけをしたかどうかということ，そういう青年の報告によりますと，個人差の顕著なことがわかります。性別しつけは全くうけなかった（全くうけなかったものは非常に少ないですが），ものすごくうけたというものまでありましたが，ともかく，性別しつけというものが，かなり一般的であるという結果がでてきました。その中で，大変興味深いことの一つは，男の子の学年による差は同性の中ではないんですね。つまり，女の子の方が一般的に性別しつけを沢山受けたという経験を高校生も大学生も同じ程度に報告しているが，男子学生の方はそれより高校生も大学生もずっと少ないのです。そのことは，一般に性別しつけは，ある程度女の子の方により多く与えられていることです。

それからもう一つは，親の側から得た資料です。これは親の性別しつけが，子供の性役割，あるいは性役割に関するものにどのような影響があるかということについて研究された結果で，男の子，女の子両方を持っている親とその子供を対象にした中で，子供の方はさておいて，男の子も女の子もいる母親に一体子供に対して全く同じしつけをしているか，性別にかかわらず同じしつけをしているか，あるいは一方の女の子には，女の子だからといって特に気をつけてしていることがあるか，それはどんなことか，あるいは逆に，男の子の方は女の子と同じように扱う以外に，男の子だからといって，こういう点に留意している等々のものがあるかどうかということについて質問してみました。ところが，その結果は大変複雑で両方とも，男の子も女の子もいる親ですが，男の子にも女の子にも，それなりに男の子だから男の子らしい，あるいは女の子だから女の子らしい配慮をしているという両方の子に性別的なしつけをしているケースと逆にそういうことは全然気にしていない，男の子だから女の子だからと全く区別していないという一貫しているケースは全体の半分くらいなんですね。ちなみに申しますと，男の子，女の子とそれなりに性差を考えてしつけているというのは全体の34%，逆に全くそういう区別はしていないというのが21%，その間の45%ぐらいは，一方はしているけれども，一方の子にはしていないというのです。しかも，そのわかれ方が両方あるのです。男の子はするが女の子にはかまわない。逆に女の子には女の子だからというしつけはするが男の子にはしない。という２つの組み合わせがありますが，その中で，男の方には特に配慮しないが，女の子ということで，非常に強調してしつけをするということの方が，はるかに多いのでございます。このことは，先程の青年自身の報告と非常に一致しており，女の子の方が一貫して親からの性別しつけを強く受けているということがいえるのではないかと思います。

ところで，そういうような性別しつけの結果いったい

どういうことが起るかということでございます。先に申しましたように，親の方からそういうふうなしつけを子供は受けているのですから，それが効果があるかと考えますと，その効果は自然と現われるはずです。

例えば男の子だからといって強調したしつけをしますと，男の子は非常に伝統的な性役割観を持つようになってきます。そして子供自身も自分のそういう伝統的な性役割に合致した男の子らしい子供になっていく。そういう意味では，親のしつけの効果が非常に順調に男の子の場合は現われていくというのです。ところが女の子の場合には，小学校の４年生，６年生しか調査していませんが，性役割の違う男の子と同じ効果が現われています。つまり，母親が小さいうちに性別を区別して女の子らしいしつけをすると，女の子はそういう性役割を持ってきます。中学２年生の段階になるとこの関係が逆転いたします。もし女の子にそういうしつけをしていると，女の子自身がそういう伝統的な性役割観とは逆のものを持つようになってきます。つまり，相関的なグラフで見ますと，マイナスになって現われてくるということがあります。従って女の子についてのしつけは，男の子の場合程そう単純に親の思うように，むしろならないということになるのです。

このことはいいかえますと，しつけというような仕方だけで親から子供へというしつけの過程だけではありません。もう一つ別な学習の仕方ということを考えなくてはいけないということが，一つには示唆されるように思います。

このことで私が考えました二番目の点は，親からこうされるからとか，前からされている等と考えますけれども，文化から，価値からされるというような形で形成されるだけではなくて，そこに生を受けた子供が，その中にありながら，ある程度大きくなりますと，自分自身が例えば今の問題でいいますと，他の人から尊敬を受ける女の人になってほしい，あるいは男の人になってほしいという形でしつけられる以外に，自分自身の性役割に関する規範を作るようになってきます。世の中で親がこうするからこうするというのではなく，自分自身の理想とするあり方，小さい時はあるがままの男の子はこういうものだ，女の子はこういうものだというように即時的に受けとめていますが，成長するに従い，あるべき性役割，あるいは女の子だからあるべき生き方という風な性役割概念を形成するようになるし，現実はこうで，理想はこうで，社会ではこのように考えられているなど，いろいろなレベルでの性役割概念が一つの軸になって子供の性役割の形成がもう一つそこで起ることになります。

いろいろな研究の中で，現実と理想のいずれの項をみても，女の子の場合，その差が非常に大きいことがわかりますし，またそのことが子供自身に非常に大きなconflictになっております。自分はこうなりたいけれども，プレッシャーはこうであるというようなところに，いろいろな問題がおきてくるのだと思います。これは単に性役割の問題にのみとどまらず，もっと全体的な自分を受容できない，いつまでも情緒不安定にあるといった，特に女性の場合情緒的な安定が非常に遅いという研究もなされている位です。

時間がきましたので要約したいと思いますが，性役割に関する今日的な問題として２つほど申しあげておきたいと思います。

一つは，当然女の子にいろいろな敵を左右する問題があるということ。女の子の生涯における問題が一つと，もう一つは，あえて女の子だけのものではない問題とがあります。それは何故かといいますと，女の人がどういう究極的な状況にあるかといえば，それは，後に大体の人がなる母親としての役割の受けとめ方や女性意識の形成が最近大変に問題になっていますが，要するに母親roleのあり方を含む問題があります。

これは，子供が発達していくことに大変関与しております。そういう意味では，ただ女の子の問題にとどまらない，人間全体にかかわる問題ではないかと思いますし，もう一つは男性の側にとっても，これは後で佐藤さんがお話になると思いますが，「こういうのは女の人の役割だ」というような形で意識しているということが，果して男の人にとって，どのようにとらえられるか私も疑問に思うのです。例えば，一人で生きるということが，経済的あるいは心理的な独立ということではなくて，もっと生活的にきちんと生きられる，疎外にならないということも含めたことと考えますと，男の人にとっても，こういう問題は必然的にあるのではないかという風に私は考えております。大変急ぎましたが，また後で時間があればお話したいと思います。

武川：武川でございます。私は先程司会の先生からご紹介いただきました通りに，小学校の教師で，心理学の本というのは，大学の頃あまり喜んでではなく，いやいやながら読んだことがある程度で，それ以後はどうしても教科書とか教材研究の本とか，あるいは指導法の本とかばかり読んで，心理学にはずっと20何年遠ざかっていたというような，そんな立場で今日お話をするのですが，私がいただいたのは「教育現場で性差をどう考えているか」ということです。このテーマの核心には，どうも触れられないのではないか，その周辺にあるいくつか

の出来事を私がつかんでいる限り，あるいは性差という中に焦点をおいて，いくつかの事例を断片的にご紹介する程度になるのではないかと思いますので，どうぞご理解いただきたいと思います。

学校には，小学校ですと児童指導要領という一種のカルテにあたる一番大事な調度があります。あと，出席簿も非常に大事なものです。その他にいろいろな調度がありますが，名簿を作ったりするときは，ことごとく男の子が先であって女の子が後という風になっているわけです。

それは，そう文部省が決めたのかどうか，その辺はわかりませんが，すべての名簿がそうであって，逆にするということは絶対にありません。気まぐれな先生であっても，逆に名簿を作るということはまずないわけです。

それから，いろんな事柄を順番に行うということもあります。この場合も殆んど男の子が先でその後女の子。前の列は男の子で，後の列が女の子。先にやるのは男の子，後が女の子。まあ，すべてそうしているわけですね。それは私たちは区別としてやっているのですが，女の子の気持になってみると，そうした区別が常に行われ，毎日の学校生活の中で行われていると，一体どんな風な影響を与えるのでしょうか。この会場には沢山の女性の方がおられますが，私はとにかく推測だけであってはっきりわかりませんが，２・３の子供に聞きますと，それから，私自身も時々試みますが，体育の時などに女の子を前２列，男の子をその後２列という風にやってみますと，何か女の子が非常に居心地が悪そうなんですね。男の子の前に立っていることが何か居心地が悪い，精神的に不安定になってくるというのは，大げさですが，全員「先生，やっぱり男の子の後にして下さい」という風なことをいい始めるわけです。

小学校１年生というのは６歳７歳ですが，１年生のような小さな子としては，決してそんなことはなく，男の子よりも先にやってくれた，男の子よりも前に出してくれた，ということが非常に嬉しいことで，喜びいさんで男の子よりも先に何事もやるわけです。

ところが，５年生，６年生位になりますと，もう常に男の子のうしろ，後，男の子のかげ，とにかく人の後ということが習慣づけられてきていますから，前に出される，先にやるということに対する抵抗がありますが，そういうことがすっかり定着しているというか，男の子よりもうしろというのが，むしろ安住の地のような，そんな感覚になっているのではないかという気がします。私たちは決して差別しているわけではありませんが，区別のつもりが結果的には，それが差別になっているのではないか。

ですから，日本の女性は，私は全く主観的にみるわけですが，かなり控えめであって，男の人よりも先に立つということに対して非常に自己抵抗感を示すような，そういう女性が多いように思われるわけです。

それから，現在学校の先生，特に小学校の先生は，女の先生が多くなっています。東京都の場合は６：４または７：３位で女の先生が多いわけです。

私の学校は校長以下25名の教員がおりますが，25名中，女の先生が17名で，８名が男の教師です。３分の１弱なわけですね。そこで，しばしば職場の女の先生のいくつかの声ですが，これは一つの事例として聞いていただきたいと思うわけです。女の先生というのは，あまり女の子を好きではないような気がします。特に５・６年生位の男の子，女の子になってきますと，まさに，身体的にも精神的にも，性差が現われてくるわけですが，女の子たちが，まあ一クラスに14.5人しかいませんが，２班に分れたり，あるいは３つ位のグループに分れて，常にいがみあって，非常に陰険な形でいがみあう，誰かさんのことをみんなで無視しよう，まあ無視というのは村八分みたいな形なんですが，無視してみんな口をきかないようにしようとか，何かそんないやがらせのようなことをしばしば女の子がやるわけです。

比較的教師としての私たちが指導する場合に扱いやすいのは男の子の方であって，女の子は非常に扱いにくいという面があります。そのことが，女の先生自身が女であるから，その女のいやな面というか，自分自身にもある，そういう一部の子供たちが常にみせているという風なことを感じてなんでしょうか，「女の子は本当にいじいじしていていやだ。男の子は何てさっぱりしていていいんでしょう」というようなことをいうわけですね。ことごとくではないが，かなりの先生から，こういう言葉を聞きますと，７割の女の先生がいるわけですから，７割全部がそうではないにしても，男の子，あるいは女の子を見る眼が，そんな見方であって，「私は男の子の方がずっと好きだ。男はとてもかわいい」ということをいいながら，男の子や女の子に接していた時に，女の子というのは，どんな風に感じながら毎日の学校生活をしているのだろうかという点でも，いささか心配になったりするわけです。

私は東京都の小学校性教育研究会の事務局長をしていますが，私たちの研究会の性教育に関心を持って集まってくる人たちの９割以上は女の先生です。小学校性教育研究会の会員は，会長は小学校の校長ですが，その人が男であって，あとは私と２，３人が男であって，したが

って98%といってもいいと思うのですが，小学校の性教育に関心を持つ人の殆んどが女性であるといえます。女性であっていけないということはありませんが，やはり，男女のバランスというものは，とれていた方がよいと思うわけです。女の先生が偏見を持っているとか，そういう風なことをいっているわけではありませんが，そういった何人かの先生方が口にする言葉の中に，ちょっと気になることがあります。それは子供に接する，あるいは性教育研究会に集まってみえる殆んどの先生方が，女の先生であるということを考えた時に，国語や算数は男の先生であっても，女の先生であっても概して教え方は同じだと思いますが，性教育となりますと，やはり自分自身の性というものが非常に色濃くでてきて，微妙な点で男女の偏見といったものが言葉の中に出てきたり，表情や態度に現われるということもあると思うのです。

ですから，そういう意味でも，性教育研究会でも，もっともっと男の先生が集まってほしいと思ったりするわけです。

多くなってきている女の先生が，男，女について，あるいは，男らしさ，女らしさについて何らかの偏見を持つようになるのではないかと感じるわけです。「男らしくしなさい」とか「女らしくしなさい」というのは，私たち男の教師よりも，むしろ，女の先生の方から多く聞かれる言葉なのです。

さて，学校で，特に小学校で「性教育は一体，どんな風に行われているのか」ということですが，実際には殆んど行われていません。性教育のとらえ方にもよるわけですが，いわゆる性教育というものは，あまり行われておりませんので，日常，男の子や女の子に教師がどう接するか，あるいは，仲良くしなさいとか，いろいろな学校の中の子供たちとの触れあいの中で，性に関する様々な指導や子供たちとの接し方はありますが，授業として性教育というのは殆んど行われていません。

わずかになされている性教育も，子供たちの身体が変っていく時期をとらえて２次性徴の問題を指導します。その時に，ある程度性の問題について微妙な問題を投げかけているのは，どこでも，男らしさ，女らしさ，女性ホルモン，男性ホルモンが噴出されて，男の子は男らしく，がっちりしてくる，筋肉がついて男らしくなってくる，体つきがこうなってくる，こうなるんだぞといくつかいって，女の子の場合には，女性ホルモンがあるということで，体つきが丸くなってくる，やさしくなるという風なことをいうわけです。先程，間宮先生のお話にもありましたように，男だからこう，女だからこうというような固定的に捉えるということは，誤りであるということは明らかですが，しかし，小学校の現場では，そういった捉え方が，かなり一般的であって，私たちも時々，性教育の授業を見せてもらいますが，その中で，男の子はこう，女の子はこう，４年生位になるとこうなって，５年生になるとこうなるんですよということ。この先生は個人差のことは頭にあるんだろうと思いますが，あまり，そのことに深入りしないで強調しないまま，その授業が終ってしまうということが，しばしばあります。これもやはり，かなり問題なわけです。

文部省の学習指導要領の中では，５年生で初潮指導を行うようにということが書いてあります。初潮指導は確かに，どこの学校でも行われています。ただ，行われる形として，「今日は５時間目，女の子だけ，ちょっと集まりなさい」ということで，３クラスか４クラスいっしょにして，女の子だけを一個所に集めて，昔ここにいらっしゃる女性の方々も，そうだったんだと思いますが，あいかわらずの形でやっているわけです。昔ほど，暗くて，じめじめしていて，かくしごとということはないと思いますが，それでも，まだかなり悲観的ですね。授業が終った時に，「今日勉強したこと，あまり男の子にペラペラしゃべるんじゃありませんよ」という風なことが加わりますと，性というもののイメージがそこで決まってきますね。勿論あまりペラペラしゃべる事柄ではないにしても，非常に恥ずかしいことで，特別なこと，女の子だけにあることで，ということは「ひたかくしにしなくてはならないこと」というイメージをそこで与えて授業が終るわけです。

ですから，男の子が興味を持って，どこで何をしてきたんだという風なことですが，本人がシーン，シーンと口をつぐんで一言もいわない，そういう形で小学校で性の問題あるいは男と女の人間関係の問題にも発達していくと思うのです。女の子として形づくられていく，それから，初潮指導の中では，将来お母さんになるためにとか，赤ちゃんを生むために，こういうことがあるという風にいっているわけですね。

それは，間違いのないことで，排卵があるということは，将来，女性として子供を生むための排卵ですから，それはそれでいいと思いますが，とにかく，くり返し，くり返し，あなた方は将来お母さんになるんだからとか，赤ちゃんを生むのだから，ということですと，赤ちゃんを生まない女性とか，お母さんにならない女性というものは，やはりちょっと変わりものなんだとか，そういう風になってしまうわけです。

だから，女の子というのは，小学生であっても，非常に結婚にあこがれます。結婚にあこがれるというより

も，結婚衣裳にあこがれるといった方がいいのかも知れません。

今日，電車の中で，女学生が，私のうしろにいたので顔はよくわからなかったのですが，今日が17歳の誕生日だというんですね。「私，今日17歳になっちゃう。とうとう17歳になっちゃったのね。いよいよ，おばんね」というようなことをいっていました。私は驚いたのですが，私のような年齢がおじんとかおばんとかいわれてもあまり意地になって否定はしないのですが，17歳がもう女生徒の間では「おばん」だという風にとらえられているということです。そうしますと，23歳とか24歳というのは，一体どう思うんだろうとか，学校には４年制の大学を出た女の先生が全部なわけです。そういった４年制大学を出た女の先生というのは，自分自身の結婚の問題でかなり苦労しているわけです。もうだめだということで，あきらめてしまったり，という先生が私の周囲にも非常に多いわけです。女というのは，やはり４年制の大学に行かない方がいいという風に，そんな態度で子供に接していやしないかということです。

それから，お手元にわら半紙の資料を用意しました。（資料参照）私の学校の子供たちを中心に，これは数にしますと，男177名，女203名ですが，２年前から，機会あるごとに６年生の子供たちに，あっちの学校，こっちの学校，いろんな知り合いの先生方にお願いして１クラス，２クラスという小さなクラスを積み重ねていって，これだけの人数にしたということであって，２年間の時間的なづれがありますので，ご承知の上でごらん下さい。

男に生まれてよかったか，女に生まれてよかったかということです。生まれかわるとしたらということです。男の子はやはり男，社会のせいでしょうか。もう一度男でありたいという風な子供もいます。

それから，女の子は特に６年生になりますと，今度は男に生まれたいという風になって，もう一度女というのは比較的減ってくるわけです。ただ，小学校１年６～７歳の子供に聞きますと，男の子は100％もう一度男に，女の子は100％もう一度女というんですね。その理由はまことにかわいらしくて，スカートがはけるとか，髪を長くすることができるからとか，お母さんのように料理ができるからとかの理由でもう一度女の子といっています。

男の子は，男の子はあまり叱られない，よごしても，乱暴してもあまり叱られないという非常に強いメリットがある。男の方が強いんだとか偉いんだとかが100％なんですが，それが３年生位になると，これはデーターですが，あまり信憑性がありません。私自身の40名のクラスの３年生で，それが半々位なんですね。女の子は，１年生の時には100％女に生まれたいといっていますが，３年生になると，ちょっとそれが揺いできて，やっぱり今度は男の子がいいかなあという風になってきて，それが６年生になりますと先程話したようになってきます。

それから，資料の一番最後の方には，私の学校の子供たちの名前を658名ですが，一つ一つあたりまして，名前にどんな文字が使われているか。これは私なりの仮説がありまして，親というのは，子供に名前をつける時に親の願いとか，期待というものをこめて，一字一字どれを文字にしようかということで選ぶのではないかということで調べてみたわけです。また，実際に子供たちに宿題を出して「自分の名前はどんな風にしてつけられたのか，お父さんやお母さんに明日までに聞いておいで」といって，「できたら紙にちゃんと書いて，みんなにもわかるように，発表できるようにしておいで」といいますと，ここには，まさに，この名前のような，親の願い，これこれ，こういう理由で，こういう名前が僕の名前につけられたそうですとか，女の子の場合にも，そういうことがあるわけです。男の子は強くたくましく，女の子は優しく，可愛いく，美しく，そういう親の願いがあるわけです。

親の殆んどは，そういった考え方を持って，子供に接し，学校の現場でも，女の先生が増えつつあり，女の先生自身がもっと，しっかりしなければならないと思うのですが，女の先生自身もかなり，かなりといってはいけないのですが，多少偏見を持っておられます。そういう中で，私たち，男性教師はどうかといいますと，自分のことはあまりいわなかったのですが，私などは個人的には影響をなくそうと思っていますが，多くの男の先生はやはり，かなり偏見をもって子供たちに接しているようですね。

時間が来てしまいましたが，あといくつか学校で実際どのような性教育が行われているかについて，後ほどご質問があればご紹介したいと思います。失礼いたしました。

泉谷：泉谷です。もう一時間もたちますと，皆さんお疲れでしょうから，この辺で少し場違いといいますか，心理学とはかけ離れたお話を申しあげたいと思います。

「栄養学からみた性差」こんなものあるんですかという風に私問われまして，一瞬たじろいだのですが，「あります」と非常に素直に答えてしまって，あとで後悔したわけですが，私なりに性の差というものを，どんな風に考えているかということを皆さんにお聞きねがって，

むしろ，それを心理学者がどう受けとりますか。それから，皆さん方これからの人間の社会行動の中でそれをどうお考えになりますか，という問いかけで，私の話を理解していただきたいと思います。

皆さんご承知のように，先程，間宮先生のお話にもありましたが，ウィーク・ファースト女の人は弱い，これは栄養学的に見ても女の人は弱いようにできているわけです。

その第一は，女の人が一日に消費できるカロリーというのがあります。これは，最大消費カロリーを測定してみますと，普通の男性でもそれはできないことですが，特殊な訓練をすると，ある特異な人間が約一日8000カロリーの消費労働ができます。これは特殊中の特殊な状態です。それに対して，女性が本当に特殊な労働を負荷して，どの位の労働ができるかというと，これは5000カロリーをこえることができない。

これをごく普通の人間でみますと，日本人の平均が大体，普通の男性，普通の労働をしている中間的な男性で現在2600カロリー，女性で2200カロリーです。ここにいらっしゃる方は，よく勉強なさる方で，あまり労働なさらない方だろうと推測いたしますと，ひどい人で1600カロリー，寝ているような方ですね。多い人でも，スポーツを一日わずかテニスをやる程度，その位の労働数ですと100カロリー～200カロリー負荷される程度で，2000カロリーを少し出るか，出ないか，非常に低いカロリーで，一日一日を生きておられる方です。

そんな場合でも，問題は男性と女性に最低エネルギー，どういう風にどんな風な状態でいられるのか，どうか，このことについての研究者が極めて少ないわけです。

したがって，研究が進んでいないわけですけれども，私が低開発国にいって，インディオという原住民の調査をしますと，比較的人間のオリジナルな労働形態というものがみられます。人間そのものは，人間自身の食べものを自給自足する中で，一日必要な労働エネルギーというものは，どうしても2400カロリーをこえるわけです。この2400カロリーというのは，皆さんご承知かどうか知りませんが，基礎代謝量といって，人間がひっくり返って寝ていて，眠っていてといいますか，ぼんやりしていても使うエネルギー，これが低い人でも（小さい人は低いわけですが）700カロリー，多い人でも1100カロリー位になるわけです。その2倍以上が負荷されて，2200カロリー以上，大体倍になっているわけです。

そういう時に，人間の生体条件というのは，いろいろな側面から検討してみて，非常に安定しているということがわかってきました。じゃあ，人間というのは生態に位置する側面で，どんなところで安定しているのか，不安定なのか，をみたらいいのかということになりますが，一つのメルクマールとして，人間を健常者と病弱に分けて，どんな生体条件の時にどんな病弱がふえるかということがございます。その病弱をみるわけですが，それには2種類の方向があります。一つは完全に病理学的にいって疾病であるという，組織学的にも代謝的にみても疾病であるしという風に，いわゆる私どもが普通いっている病気でございますね。そういう病気があるかないかということをみる。もう一つは，組織学的にみても，いろんな面でみて病気といえないようなもので何となく異常が存在する。いわゆる日常の臨床医がいろいろ検査しても，結果としては異常がみえない。しかし，正常ではない。こういう状態を難易性の心身症（PSD）という方もいますし，いろいろな病名がつけられてしまって，最近は問題になっていますが，皆さんの聞かれた言葉では「ノイローゼ」という言葉が最も一般的だと思います。そういうノイローゼの人たちが，どう増えているか，どう減っているか，あるいは，いるか，いないかというようなことを一つマークする。

東京のような高度に発展した社会で，人間の労働が消化されてきまして，だんだん必要エネルギーが減ってしまう。そして労働投下され，さらに小さな運動まで消滅していくような労働高投下におかれた場合には，今申しました2つの異常が同時に出てくるわけです。ノイローゼが増加してくるし疾病も同時に増えてくるということです。糖尿病であるとか，心不全，腎不全，肝不全とみんな不全とつきますがいろんな機能不全が増えてまいります。

それと，もう一つ，こじつけではありませんが，正確なデーターか明白ではありませんが，子供を生む機能の低下ということです。これも著しくみられるわけです。私のデーターでみますと，今のところ子供を生む能力のない男性は，この20年間に6％増えている。これは2000名の私の全国6カ所を無差別抽出したものですが，20年間に6％増えたという結果を得ました。女性でなんと11％増えております。どうしてこうも異常が増えたのかということを私自身は労働の質の変化によるものだという風に考えております。

それをもう少しグローバルに，そして進化論的に問題を生物として追求してみますと，こんな夢のような話が考えられるわけです。

人間でも，どんな動物でもですが，細胞のレベルで問題を考えてみれば，植物の細胞と動物の細胞は多少の違

いはありますが，大きな違いはありません。地球の生態形の発展過程をみますと，皆さまご承知のように，植物の結成から始まりまして，ある状態で気体の変化が起る。植物が生産してくれた酸素であるとか，炭酸ガスのバランスであるとか，そういう様な条件の中で動物社会が生まれてきます。そういう意味で発生の起源は植物形態にあるわけなんで，植物形態に起りうる現象は，動物の形態にも起りうる現象だという風に一つ重ね合わせてみようじゃないかということで重ね合わせて現在の状態をみたわけです。

そうしますと，植物で皆さんよくご存じのように（ご承知じゃない方も多いと思いますが）植物には非常に適量の過敏な肥料というか，えさの条件というものがあるわけです。多少の窒素を調節することによって花が咲いたり咲かなかったり，実がなったりならなかったりということが大変微妙に起るわけです。

一般には過剰窒素は葉っぱを育てることはできるけれども，花を育てることはできない。そして，その後，種を作ることができない。これは植物を育てる場合の窒素造成の原則であります。そのことを直接動物に重ね合わせることが正当かどうかわかりませんけれども，私自身は非常に研究量も少ないということもありまして，この段階では重ね合わせてみよう。人間でも摂取する窒素の量が，これはやさしくいいますと，たんぱく質といっておりますが，たんぱく質の摂取量で概算していただければよいと思います。そして排泄尿素ということになりますが，尿素中の窒素ということになるわけです。そのバランスということになるわけですが，このバランスがとれなくなった時に，人間の生態形に与える影響は植物の生態形に与える影響とはある程度の同一性があるのではないか。そのことが人間の生態形に強く影響を与えて先程申しあげたように，子供を生む能力の低下，そして，これは私の専門になりますが，女性の母乳分泌率，現在日本では，なんと26％の女性しか母乳で子供を育てられないようになっていまして，後は全部牛におまかせしているわけですが，そういう風に本当に20年間に91％の母乳分泌率が26％までに低下するという極端な事例があるわけです。

日本は最も世界で複雑なたんぱく質をとっている国です。皆さんも経験なさっておられるように，朝パンを食べる。お昼はおそばやうどんを食べる。夜はご飯を食べる。お肉は食べるし，魚は食べる，大豆は食べる，何でも食べるはいいが，豚のようにというか豚以上にといった方がいいのかも知れません。何でも食べる。そういう国民というのは，世界広しといえども，日本にしかないわけで，私の調査では，３日間に食べる食品は日本では70種類食べております。

アメリカでは19種類で，メキシコのインディオは７種類。たんぱく質の種類，窒素のいろいろな条件からいって，メキシコのインディオは非常に生態について研究しているというか，安定したたんぱくの供給がある。同質性のたんぱくが供給されています。従って生態に与えるたんぱく性ストレスはむしろ弱いだろうと考えられるわけです。

それに対して，日本のように70種類以上ものたんぱく質を摂取するような国民というのは，窒素の形態が非常に違いまして，皆さんご承知のように，たんぱく質というのは，約18種類のアミノ酸で形成されている。そのアミノ酸が生体内でまたいろいろ構成されて変化していく。そういう形でアミノ酸の種類に加担して，これがいろいろくっついてできるたんぱく質の種類というのは，当然新しくなってそれが基礎ホルモンというホルモンを形成して，そのホルモンがいろいろ人間の恒常性を保っているわけです。その恒常性を保つ，恒常因子に近い部分のたんぱくができた場合，それは時には，私自身として，拮抗体といいますか，そのホルモンの作用をおさえるような形で働いたり，それと逆な働きをもったりする部分も可能性としてでてくるほどに，植物からいろんなたんぱくをとっている。このことは，非常に大きな問題ではないだろうか。そして，日本という国が最も子供を生めなくなりつつある時，皆さんご承知のように最近では５つ子が生まれるとか，４つ子が生まれるとか，これは排卵誘因剤を飲まないと子供が生めなくなるという結果でございますね。

５つ子が生まれた時，だいぶ喜んでおりましたが，女性の機能が低下した結果，ああいう子供が生まれているという現状から，ああいう状態がまだ誘因剤だけで生まれるのならいいのですが，夫婦共々生む能力を持たないというのが20年間に１％増えるというのは大変なことでそれが数％，５％こえる状態になってきたというのは，まったく大きな数字といわなければなりません。これを地球の年代で，何千年，何万年という単位で考えてみたなら，人間が滅亡するのは非常に簡単な年代であると考えられるほど，恐ろしい数字がでてきているわけです。

そういうことで，人間が労働を省力化していくことによって，低エネルギー消費形態，いわゆる低エネルギー高たんぱく質食品を食べるような食形態に移行する過程で，人間の生体内に与えていくのは，そんなに少ないものではなかろう，非常に大きな問題をかかえているのではないかという風に私は考えているわけです。

大変漠然とした話ではございましたが，これから私どもが食べる，働かないのだから少なく食べていいんだ，ということと，どういう風に食べたならば人間は安定状態で生きておられるかということとは別な問題なんだ，働くだけ食べればよいのだという考え方から，どう食べなければならないんだという栄養学あるいは病理学というものが発見しなければならないだろうという風に考えております。わからなかった部分がおありかと思いますが，補足できるようなものがあれば，その時にまたお話したいと思います。どうも失礼しました。

佐藤：今日は，学問的な先生方ばかりがお集まりの席で，私新聞記者として，ちょっと場違いな一人紛れ込んだような気がしております。

もともと，新聞記者というのは，非常に雑な人間でして直観にたよるようなところで，「あ！これおもしろい話を聞いてきた」とか，「この話はおもしろかった」とかで，最初のその直観を大事にして仕事をします。取材をしておもしろかった話を製本させるために学者の先生をお訪ねして，むりやりこちらに製本するような学問的裏づけとか，そういうものを集めてくる商売でございます。何か今日は順番があとさきになったような感じもございます。

私の場合は，新聞記者という立場から，しかも長年学芸部の中で女性問題を担当してきました。その後，10数年女性問題を中心に取材しておりますので，その立場から性差の問題を考えてみたいと思います。

新聞記者の世界というのは皆さん外側からみたのでは，ちょっとわかりにくいかも知れませんが，本当にこれは男社会でして，もう女性記者というのは，新聞協会が何年か前に調査しましたところでは，在京の新聞社の中，東京界隈の各社で（朝日だけでなく），記者職に女性の占める比率はどれ位かという数字を出しましたところ，それが１％をわっていたという，そういう社会でございます。

私が所属している朝日新聞は，この10年近く，それでも少しずつ女性記者を１年に何人かづつとりはじめていますので，少し女の人の制覇が増えてまいりました。

そういうところで，特に女性問題というような仕事をしていますと，同僚男性の評判が非常に悪いのです。日常で何か家庭崩壊とか，子供の家庭内暴力や子殺しの話が紙面をにぎわすたびに，私などは同僚の男性記者から白い眼で「こういうことが起るのは女性評論家とか，女の新聞記者が，婦人問題とか，女は外へでろとか，働けとか，自立とか，そういうことを言ってけしかけるから，家庭崩壊が起るのだ」という，何かうけあい式のお叱りをしばしばうけるのですが，それはうちの社の男性記者の頭が非常に古いということですが，ただ，その男性記者たちも誤解していますのは，女性問題を中心にやっておりますと，どうしても男女平等とか，女性の権利とかの側面が非常に強くでてきます。すると，女性が非常に自己主張をして，強く最終的には男と女が全く同じもの，先程，先生方がいろいろおっしゃいましたけれども，質的にも内容的にも全部同じものに，権利としての平等というものではなく，同じ人間を作りだしてしまう。そのような方向に進んでいってしまうのではないかというような誤解をうけるわけです。

私はその時に，しばしば申しますのは，そうではないのだと。ともかく，女の人は産む性を持っている。産む性を持っていて身体の機能が違う以上産まない性である男の人と肉体的には確実に違うわけですし，それをいくら権利の平等を主張していっても，そこが同じになることは哲学的にありえないわけです。その生物学的な違いからたぶん発生してくる様々な女の特性とか，男の特性とか，その上にたった女らしさとか男らしさとか，そういうものがたぶん存在するに違いないと私も思うわけです。

ただ，ここで今いわれている，女らしさ，女はかくあるべき，男らしさ，男はかくあるべきという，そういうらしさとか，男の道とか，男とか女のあるべき姿というのは，婦人問題の視点からみると，古典的，文化的に作られてきてしまったという感じがしてならないわけです。

これは私がそのように思い込んでいるだけでなく，武川先生も教育現場からの様々な事例の中においてもみられることです。それから，柏木先生からも，親と子の家庭内でのしつけの問題についても，いろいろお話し下さいましたが，そういう古典的な文化の側面を一度あらい直し，考え直して，その上にたって，男らしさ，女らしさというものをもう一度組み変えていかなければならないのではないかと思います。それが今日の女性問題全体の大きな流れになっているわけです。

私自身は現在主婦の仲間でありますが，31歳の後半に遅く子供（息子）を持ちました。その時に，同僚の記者が「佐藤さん，男の子だけじゃなくて，もう一度挑戦して女の子も生んでごらんなさい。男と女というのは，生まれた時から絶対に違うのだから，いくら佐藤さん頑張っても違うんだ」という風にずいぶんいわれたものです。

それで，違うんだという「違い」，しかしそのどこがどういうように違って，しかもその違いが生まれつきの

違いなのか，あるいは男の子が生まれた時に，女性の差別などというのは生まれた瞬間から始まるとよくいわれますが，私は年齢的にみて子供は一人が限度だと思っていましたから，男，女どちらでもよいと思っていましたら，たまたま男の子が生まれたようなわけです。

その後，私は周囲の女性や男性に「お子さんはお一人だけですか」とよくいわれました。で，「どちらですか」「息子です」と申しますと，「それじゃ，お一人でももう安心ですね」そういういい方です。それは，あんに後継ぎとか，男が我々の後を継いでいくとか，そういう形の中での友人たちの好意ある発言であるとは思うのですが，私はそれをいわれるたびに，とても妙な違和感を自分の中に持つわけです。

息子を育て始めました時に，私はこんなに男の子を育てるということは楽なものかとまず思いました。

私は何年か前（もう4年ほど前になりますか）に，「女の子がつくられる」というタイトルの教育現場からのリポートをまとめまして，新聞に連載して，その後，一冊の本にまとめました。これはまさに武川先生が，縷縷学校内のことをご説明になりましたが，教育の問題というと，学校群であったり，偏差値の問題であったり，進学の問題に集中されがちですが，武川先生は男の先生の立場から視点をむけて下さっているということは大変に心強いと思います。そういう中で，学校の教育現場とか，教科書の中味だけでなく，その周囲や自治会や生徒会などでも，きまって会長をつとめるのは男生徒で，そして必ず女生徒は副会長であります。これは，学校の規約などにうたっていなくても，殆んどの学校が慣習として，そうなっているという様な形で，女の子がいつも副の立場に，サブの立場におかれているというような，学校全体の問題をまとめたものがこの題の本なのです。

そのような観点で，私の息子をみておりますと，その息子をとりまく文化というものが，実に男は将来一人で立つ，しいては自立していく。それは主として経済的な自立である。そして最終的には，妻や子供を養っていくものだという風に，周囲が育ててくれるのではないかという気がいたしました。ですから，私はこの時，この息子に親としてしなければならないことは，少なくとも息子が大きくなった時に，女を人間として，対等の人間として尊敬できる，また人間として扱える男に育てていくことと，同時に息子に家事の力をしこんでいくことの必要を感じております。

私はいつでしたか，主婦の方々が集まった席で，男の子を育てるのは楽だと思ったというような話をしましたら，10人ほど集まった主婦から反論をくいました。「そうではない。男の子を育てるのは大変だ。女の子を育てるほうが，やはりずっと楽である」といわれるのですね。

理由はどうしてですかと聞きますと，「男の子は，何とかよい学校に入れて，いい企業に入れなければならないが，女はまあ，できが悪かったとしても，相手しだいでどうにでもなるので，女の子にはそんな神経を使わないですむから」という風に，そのお母さんたちがいっておられました。私はその時愕然としてしまいました。

いつでしたか私は取材を通して，西ドイツの特派員の日本に長くいる男性の記者と話したことがあります。ドイツ人というヨーロッパの人間として，「日本はとても不思議な国だと思う。特に女性問題では不思議な国だと思う」というのですね。「それはどうしてですか」とききますと，「今家庭にいて長い人生，平均80年というライフサイクルの中で，少くとも中高年の女の人たちは，自分たちの生き方を求めて様々な勉強をしたり，模索したりして非常に苦しんでいるのに，そのお母さんたちが，育てている子供たちの育て方をみると，自分の生きにくさを，まさにその通りに再生化するような育て方しかしていないではないか」というのです。いいかえれば，日本の親たちは，男の子に対しても，女の子に対しても，同じ様な生き方をさせるような自分の生きにくさを再生するような育て方しかしていないという指摘になります。私自身もそういう年代として大変胸にこたえました。

あまり時間もありませんが，先程柏木先生もおっしゃった家庭内のしつけに非常に男女差があるということについてであります。具体的な例として，総理府が出している，日米の中学生と高校生の比較調査があります。家庭内の自分の役割というものについて調査しておりますが，家事（食事の仕度とか，あとかたづけ，掃除，買物の手伝いなどを含む）について，アメリカでは「している」というのが女の子96.5%，男の子88.5%に対し，日本では女の子68.7%，男の子30.2%ということです。また家の中で，何の役割も持たされていないという子供はどれ位いるかと申しますと，アメリカでは男女とも同率でわずかに1.4%にすぎません。100人のうち1人です。これが日本になりますと，女の子が25.9%で4人に1人は何もしなくていいわけです。それから，男の子では47.3%で，これは極端にいいますと2人に1人の男の子は何もしなくていいということになります。

これはアメリカとの比較調査ですが，アメリカの方では家庭内の手伝いや世話を行っている比率は確かに高いが，ここで重要なことは，日本の方が低いということだけでなく，むしろ，そういうことよりは，アメリカでは

男の子と女の子の男女差が非常に少ないということですね。ところが，日本の場合には，家事については女の子の半分，しかも，何の役割も持っていないというのは，男の子は女の子の倍になるわけです。

このように家庭内のしつけ一つとってみても，男の子と女の子の育てられ方は，ずい分違っていると思います。

しかし，反面先程申しました経済的自立ということで，男の子は育てられていきますが，しかし男の中にも人間の多様性というものはあるわけで，男であるがために，100人が全員すべて将来，とにかく一流企業をめざして第一線で，高い月給をもらって，妻子を養わなければならないというところに追い込まれていったら，男にとってもかなり辛い作業ではないかという風に私は思います。

最後に申しあげますと，先程ちょっとふれました自立ということについて，私は今年の正月から２～３ケ月かけまして「男の自立」というシリーズをうちの紙面でとりあげました。その時にも同僚の男性から「こういうことは，あまりやられるとまずいから早くやめてくれ」とか，冗談半分に「女房に読ませたくないから」とか，ずい分とひんしゅくをかいましたが，私は自立というのはしかもこれから次の世代が女の子も男の子も多様な生き方が可能な時代をもたらすためには，一人の人間の中に，男の子，女の子，経済的自立と生活の自立と両方が合わせ持たれること，これが一つの好ましい自立であって，そして自立した男と女が結婚し家庭を築いていくことが大事ではないかと思います。今は経済的自立をした0.5の男と，自立した0.5の女との２人が結婚して１という自立の家庭を築いているにすぎないわけですね。

ですから，核家族というのは非常にもろい家族の形ですから，どちらかに何かがあった時に，これはまさにがたがたと崩れてしまうわけです。しかも自分が違った生き方を求めた時，男の人にしても，女の人にしても，この足りない者同士，補う自立の形では非常に窮屈で，自分のしたいことも，なかなかできないということになってくるわけです。

婦人問題というのは，決して男と女を全く同じに，同じというのは性差の全くない人間にしたてるという意味ではなく，私は女の人も多様な生きやすい生き方を求められるような世の中，そしてその反面である男の人にも多様な生き方をもたらす時代，そういうものをもたらすのが，今の婦人問題の大きな流れであるのだという風に考えております。

何か申しあげたいことがいっぱいあるのですが，時間がきましたので，とりあえず。

司会：先生方どうもありがとうございました。一通りお話をいただいたわけですが，あと一時間ほどありますので，先生方に，どうしてもこれだけつけ加えておきたいというようなものがございましたら２～３分位の程度でお願いいたします。

間宮：先程これからの性教育の実践にあたって，ウィーク・ファーストとかマナーを養なわなければならないという根拠として，男と女の性生理や性心理についてお話しましたが，もう一つこの性教育で取りあげることは，男女の性に関する心身両面にわたる負担の平等化という観点です。それに関して，女の平均寿命が長いということなどは子供もよく知っておりますが，その理由は今ここで申しあげませんが，そのことをとりあげるのにしても，月経の負担を考えてみますと，女性で初潮をむかえて嬉しかったというのは殆んどゼロに等しい。大変煩わしいものが現われたとうけとっております。さらにまたその後，毎月その煩わしさを経験しているわけです。月に大体５日そういった心理的負担があるとしますと，１年で60日，約２ケ月マイナスの期間があるわけです。

13歳で初潮を迎えて50歳で月経閉止になるとしますと，37年間，すなわち2220日の負担になります。ちょうど6.1年の負担になります。だから，女の人が５年長生きしてもあわないことになります。まして，子供を妊娠し出産しますと，妊娠期間と出産後約５ケ月はメンスがございませんので，それを差し引きますと，2080日ということになります。しかし，それ以上に妊娠と出産の肉体的心理的負担は大変なものです。２人の子供を生むと倍加いたします。

出産にしてもそれ自体大変な負担なのですが，日本の出産は，夫とか家族を立ち合わせません。ヨーロッパでは，殆んど立ち合わせています。そして激励します。そういう意味での安産をしますが，日本では孤独の中で産みますから，かなり不安になります。そういうものまで入れますと年数どころではなく，大変な負担です。

こういうことを教えれば，女というのは大変なんだなあ，男としてどうこれを援助していけばいいかとか，負担を平等化するにはどうしたらいいかといったことも考えさせられます。それから，ドイツの３年の教科書の「男女の役割」という章の中に，夕飯のひとときのさし絵が出ているんですが，夫が自分のワイシャツのつくろいをしてまして，そばで妻君が本を読んでいるという日本ではちょっと考えられないものです。

それぞれが，自分でやれることは，自分でやるのが役割だという様なこと。それから，さし絵の中で男の子と

女の子が同じように人形遊びをしている。封建的といわれるドイツでさえ，こういったことを小学校からテキストでとりあげて教えているわけです。

司会：他にございましょうか。

佐藤：先程ちょっと，世界的な流れまで申しあげられませんでしたが，一つだけつけ加えますと，1975年に国際婦人年というのがありまして，日本の中でもやはり大変大きく，女の人の士気が変化した時期ですが，それ以降に続きました国連婦人の10年という設定がありまして，1980年，コペンハーゲンで女性が集まった世界大会がありました。こうした一連の世界的な行事の中でとりあげられていますのが，先に私がのべました古典的なとか，あるいは伝統的な男女の役割分担を考え直す，これが今世界的な女性運動，あるいは女性問題の流れになっております。

だから，この古典的な役割分担を考え直すという風に申しますと，すぐ女は働きにでて，男は家の中で家事をやるのか。そっくり入れかわるのか，というような考え方をする人がおりますが，そうではなく，くどいようですが，ひとりの人間の中に合わせもつという，そういう方向にいくための今は，過渡期的な教育だとか，考え方だとか運動が進められているということをつけ加えさせていただきました。

司会：それでは，これでお話をいただくことをやめまして，お集まりの皆さまから，どなたの先生にでも結構ですから，何か質問や意見がございましたらお願い致したいと存じます。その際に，どなたの先生に対してか，また，もしおさしつかえなければ，氏名と所属をおっしゃっていただければ幸いかと思います。どうぞ。

A氏：定年退職しましたので所属はありませんが，長い間とくに身体障害関係のリハビリテーションの仕事をやっておりました者ですが，佐藤先生におうかがいしたいのです。先生の著書なんかございましたら，読ませていただきたいので，お教えいただきたいのです。

佐藤：あとでお答えしたいと思います。

B氏：学芸大学の者でございます。おふた方の先生に質問させていただきたいと思います。まず，第1点は武川先生に。大変おもしろいデーターで，特に先程「生まれ変るとしたら」というのがありましたが，この種の調査は各種行われているようですが，実は私どもも昨年先生の区とは違いますが，中野区の婦人問題の関係で調査があって，いっしょにやっていた一人なんですが，それは高校生を対象としたもので，先生の説明の中で1年生は100%女を望む，3年生になると，大体 fifty-fifty である。6年生になるとこうなっていく。高校生になるとこれがもっと逆になる。女の方が少なくなるだろうという様な傾向でご説明になったように私はうけたまわったのですが。

実は私どもが調査した限りでは，高校生はむしろ逆なんですね。女性が女に生まれかわりたいというのは多い。68年以前は女性は確かにもう一度生まれ変われるとすると，男という割合が，女という割合よりも高かった。それがだんだん減って，68年位だと思いますが，それがクロスして，それ以降は女が女に生まれたいという割合が，男に生まれたいという割合より多くなるという数字があるんですね。

ただし，それをどう解釈すればよいかということですが，中野区のケースを参考にしますと，それはむしろマイナス面を強調する女性が多い。差別を認識しながら，楽だから，責任がないから，という理由のようです。そうなりますと，むしろ，そのあたりが教育現場の中で，教育だけではないと思うが，かなり成長することによって，差別的な性役割を認識してしまい，それが女性の場合，どういう風に転換していくのだろうかという発達的なところを先生はどうお感じになっておられるのかをおたずねしたい。

もう1点は間宮先生に。先程 OHP のところで，性的興奮についてのグラフがありました。性的興奮というものが大変男の方が強いんだということで，その辺の説明を先生は大変生物学的な立場からなされたようですが，私は，それもさることながら，もう少し分析的な問題があるのではないかと思います。あの種の質問に対しては，私ども昨年東京都の高校生の性意識，性行動の調査をして実際にまとめたのですが，女子の方が非常に少なく，男子の方が非常に多いわけですね。これはマスターベーションについても同じで，女子は少なく，男子は多い。これについては，確かに生物学的なことで説明されうるのか，もっとこの種の性的興奮を感じること自身が女性はかなり抑圧されてきたのではないのか。それを表現すること自身が抑圧されるようなしつけ，性別しつけというものが強くなされてきたのではないかと私は思うのですが，それについてご示唆いただけたらと思います。

武川：先程の私がつかんでいるのは，小学校だけで，中学とか高校についてはかなり曖昧な言い方をしましたので，その辺ははっきり申しあげたいと思います。

高校については手元にデーターがありません。それから確かにどこかで読んだ記憶がある程度で，たまたま私がそういう調査をしていることで，ちょっと数字を示した時に，うちの学校ではということで，高校の先生がそ

の様子を調べてくれたその程度のデーターで先程申しあげたわけですが，高校につきましては，性教育，そこまで大げさに言われても，何らかの指導をしている学校では，女の子が自分の性を肯定するというか，生まれ変われるとしても，勿論女で結構という風な考え方をとるという方向を示すことに抵抗があるし，放っておくと，世の中男性中心の社会ですから，その影響で女の子も，女っていうのは損だという傾向がでてきて，小学校の１年生，３年生，６年生も，そのカーブの延長が中学，高校でもでるのではないかという風に私はうけとったわけです。

ですから，中学，高校あたりで確かに行っている学校では自分の性を肯定するという形が現われるし，その辺がちょっとつめが甘かったりとか，雑なやり方だとやはり今度生まれる時には男にという形に出てくるのではないかと思うわけです。

私のデーターも実は２年間にわたって，断片的に行ったもので，学問的な分析は全然加えてなく，ただ単純な指摘をしただけで，その辺はちょっと心配があるわけで，今後もひき続いて機会あるごとに，いろんな面でとらえて子供たちのこういった性への不審の問題について調べていきたいと思います。答えになりませんが，これで終ります。

間宮：男女の性意識や性行動において典型的な性差をあらわしているのは，性衝動だと思うのですが，その性衝動というのは勿論，心理的刺激にもよりますが，主要な働きは性生理的なものだと思うんです。男の生理と女の生理の違いからです。

しかし，性的興奮となると，先生がおっしゃったように，単なる生理的な緊張状態だけではなくて，いろんな面があります。特に性情報による性的刺激は，昔みたいに閉ざされないで，非常に開放されてきたという点は，確かにあるわけで，だから，性生理的緊張＝性衝動＝性的興奮ではないのです。その証拠には性的関心というのが男女間に収斂化傾向を示しているんですね。男と女のそれぞれの性的関心度が近よってきております。

そういう面からいうと，やっぱり文化的な刺激による興奮というのも，男女とも受けていると思うのです。ただ，そういった性的興奮を体験したという時期からみますと，女子の場合は，性的興奮を初めて体験する時期と異性接触とか，接触欲となか，キス欲とか，その他の性的欲求や性的行動を初めて経験する時期との間にかなり相関度が高いわけですが，男の場合には，必ずしもそう高くないといった調査結果が出ています。

板倉：最初間宮先生におうかがいいたします。私は人間の場合とか動物の場合とか大体似ている。ところが植物の場合はどういう風になりますか。私の家にはいちょうが２本あります。ところがメスの方のいちょうは太ってどんどん大きくなる。オスの方はたいしてならない。人間の場合はどうか。その辺一つご返答いただきたい。

それから，武川先生に。学校の生徒さんで女子の生徒はどういう学科がすぐれているか，男子はどうか。また，どちらがどのような方面を歩むか，音楽か，適性の問題で男子，女子の比較をうかがいたい。

間宮：植物の世界と人間の世界とひき合わせというのは，私にはとてもできませんが，ただ，日本で一番性差心理学に関した研究を最初になさってきた朝倉先生という先生ですが，この先生は，男の性を動物的であり，女の性を植物的であるという風にいっておられます。それが，どういう意味でなさっているか充分なご説明がなかったんでございます。

武川：小学生が男と女で教科において，どちらがどうすぐれているかというようなご質問だと思いますが，そういった調査は私どもはやっておりません。何かでデーターは見たような気はしますが記憶になくてはっきり申しあげられません。

いい加減なことはいわない方がよいと思いますが，私なりの感じでは，例えば，国語や算数，計算の問題等については，もう男女の差は殆んどありません。作文ということになりますと女の子の方がよい作文を書くように思います。それは読書量が女の子の方が多いですから。感受性などと結びつけてよいかどうかわかりませんが，女の子の方がよい文章というか比較的情緒的で深いものの捉え方ができるように思います。化学とか物理のようなものになると女の子は拒否反応を示します。ごく一部の女の子はそういう教科に関心を示すこともありますが，男子は夢中になって電気や磁石などの実験をしたがるが，女の子はあまり興味を示さない傾向はあります。

それから，音楽については，小学生はちょうど変声期でもあって，女の子の方が上手に楽器を演奏しますし，歌も好きできれいにうたいます。その程度しかお答えできません。間宮先生に補足していただければありがたいと思います。

奥沢：埼玉県立衛生短大の奥沢と申します。柏木先生におたずねいたします。

最近，男性の女性化，女性の男性化ということがいわれていますね。それは，たぶん一面はママコンにダメおやじという風な面もありますし，女性が社会に参加している。それに父親が協力するというような，いろんな面を含んだ共通面みたいな形ですね。

それは，それとして，子供が成長していく過程において，いい父親イメージ，いい母親イメージをいだくことが大事であるという風なことがいわれていますね。いい男性像，いい女性像をもつということが必要だということもいわれています。

そうしますと，これからの子供は，あまり父親イメージと母親イメージの差が持てなくなってくるようなことはありませんか。それが子供の自我の成長に何か影響がでてこないかというようなことから，そんなことについてのお考え，ただ，それが何人かの先生がおっしやったんですが，男性と女性は全く同じものではないのだ，ということですとまた話は違いますが，先生の先程のお考えの中で，女性とか男性とかいうのは学習の産物である，ということがお話にありましたね。そうすると，もし男性と女性の差があると，なくなってしまうと，どういうことになるかということの問です。もし，差を残すのであれば，残すような学習のプロセス，そのカリキュラムとか社会的な背景というのはどういうことになるか，その点にふれてご指示いただきたいと思います。

柏木：大変むずかしい問題だと思います。これは心理学の問題というよりもむしろ，個人個人がどのような男性として，女性として，あるいは人間としての社会であるべきかを考えるかということにかかっていると思います。その意味で私が自分の学問的な立場というよりも，もっと個人的な周囲の問題になるのだろうと思います。

私はこういう性役割の問題は学習の問題であるというその文脈だけに限って申しますと，確かに今おっしやったように家庭の中で（学校教育も含めて），男の子にとってよい男の人の個性がただ評価されたりする以外に，もっと大事な要因があるのではないかと思います。

ただ，先程佐藤さんのいわれたことに関係しますが，一番私が強調したいのは，女の人の場合に，女の人としての適性というのは，能力があるとかないとかいう以上に，ある問題に対してどの位興味を持っているかということが一番基礎になるところですが，興味に関しては歴然と性差が大きくなるほど出てまいります。この辺に女の子にいろんな問題がでてくるわけです。女の子だからといって，持っているかも知れない可能性が閉ざされたり，人間としていつまでも自信が持てないということであってはならないと思います。

最近の私の調査では，ある問題がよく出来たとき，男の子の場合，自分は能力が高いからだといって，自分の能力に自信をもってくるが，女の子の場合は，同じ出来たことに対して，教え方がよかったからよく出来たのだというように，自分についての自信をもたないのですね。こういう点は，やはり女の子にとって，自分の持っているものを伸ばすということを絶ってしまっている部分があるのではないかと残念に思うのです。

それでは，性差というものを全然なくしてしまうような形でいったらいいのかと申しますと，私は例えば，家庭の中でのしつけを考えてみたときに，世の中はそんなに権利は昔と変っていないと思っています。ですから，どのようにその家庭，小さな時に育てられてきた学習経験と，社会に出た時の規範とのずれがおこった時に，それをどのように克服していけるかどうか，そこにまたもう一つの大きな問題が女の子にあります。したがって，どういう風に小さい時からギャップを家庭でもうめたり，あるいは本人にも，うめられるような課題をどの位までもたらすことが適切なのかということも関連して考えていかなければならないと思っています。

充分なお答えはしにくいので，この辺にしておきます。

E氏：主婦ですが，泉谷先生に質問したいのです。今子供を産み分けたいということで，（男の子１人，女の子１人という希望が多い）食事の点で，よくアルカリ性食品と酸性食品で産み分けることができるとか，というようなことをうかがいましたが，それは本当に専門的立場から，かまわないのかどうか。

もう１点は，産む能力のなくなった人間が増えてきたというのですが，それはインスタントラーメンから始って，今非常に酸性食品が多くなっている現在，何らかの形で，そういう風な誘因があるのかどうか。また，そのような文化とインスタント食品がそういうものに関係があるかどうかの２点についてお願いします。

泉谷：最初の問題ですが，産み分けるというか，今乳牛はご承知のように，精子をだいぶ分離しまして，染色体でも加重をかけて分離しますと，オスになるべき精子とメスになるべき精子は分離できるわけで，精子を分離することによって，人工受精すれば，男が作りたければそのことが可能なわけです。酸性食品，アルカリ性食品というのは，そういう食品の名称があるということで，生体に対しては，酸性食品を食べて本当に体が酸性にかたよると死にますし，アルカリ性にかたよる人間も死ぬわけです。

これは pH の問題で，ほんのわずかなものでも死に至るわけで，体がそれをうまく調整しており，体が酸性に傾いたり，アルカリ性に傾くということは，全くないわけです。これは病的に，部分的に筋肉が酸性に傾くということはありますが，生態形全体が酸性に傾いたり，性的な機能が酸性に傾くことはございませんし，男性の精

子の造成機構の中で性器が酸性に傾くとか，アルカリ性に傾くということもございません。したがって，そういう食品との関係はないと思っていただきたい。ただ，今申したように，男女を産み分けるということは，機械的なものとして可能であるということはいえますし，これから，いろんな遺伝子，DNA という遺伝子がありますが，その形態がだいぶ電子顕微鏡的によくわかってきたことと，DNA の合成ができるようになって，いろんな部分の調節ができる。非常に簡単なことでいえば，男の性器をカットするような DNA も簡単に作りやすいわけですね。ですから，中性の人間を作ることが非常に作りやすい。DNA のコントロールで出来るという状態まで，今日の生物科学は発展しております。

それから，何か非常にインスタント食品の大事なところ，性的な能力の問題ですが，私がいいたかったのは，男性の労働量を低下させてしまうと，男性の役割として非常に大切な精子の造成がしにくくなるのではないかということです。ですから，それを逆に考えますと，男性の食べ方というか，男性が女性より200カロリー以上とらなければならないということは大変困難ですね。200カロリーを労働化しなければならないということで，男性と女性が同じような労働をしていたのではいけません。小学校でも中学校でも，同じ体操を始めて同じようにかけっこをやっている。それは健康づくりということでやっているわけですが，少くとも男性に対する労働化量を増加させていかないと正常にならない。これは，女性能力だけでなく皆さんご存じと思いますが，男性の成人病といわれるものは女性の20倍あるわけです。神経性胃炎，胃潰瘍，十二指腸潰瘍を代表として，そのようなストレス性の病気は男性は20倍と考えていただければよい。糖尿病もしかり，腎不全も異常に男性が高いわけです。

その時に男性に労働を負荷してやると，なおる場合や治癒数は非常に多いのです。したがって，それだけ男性にとって労働が重要な要素になっていることがおわかりと思います。先程でてきたような，単純なインスタントラーメンをどう食べるかとか，といった問題ではなくて，男の人にどう労働を負荷したらいいのか，これは社会的な大問題ではないかと思います。細かい問題については，また何かの機会があったら申しあげます。

F氏：私は会社に勤めておるものですが，佐藤先生におうかがいします。

先程のお話で，古典的文化的に作られたものとして，それをあらい直すという補足がありました。家庭的な役割分担を考え直すことの必要性というか，そういう問題について，0.5と0.5の人間が一緒になって1つになってやっている時に，何かの変化が生じた時に，対応面においてもろさがあるとのご指摘はよくわかりますが，そういう家庭的な役割分担を考え直すことのめざす価値はどういう風なものと理解しておられるのか，それと，めざす場合の限界について，どのようにお考えになっておられるか，その辺をうかがいたいと思います。

佐藤：古典的，伝統的な役割分担というのは簡単にいえば，男は外に出て働き，女は家に入って家事，育児を担当するということ，これは女性問題の女性史的な見地からみると，いろいろな問題があると思いますが，大ざっぱないい方をすれば，江戸時代までのいわゆる庶民はあまり分業とか分担が男，女という風にはっきり分れていなかったようです。その前は，分れていたとしても，それは，例えば狩猟時代をとれば一番わかりよいと思います。お互いが生きるための分担であり，生きるために始ったが，次第に文化が発達してくると，その形態が変ってきました。工業化された社会にあって，このような古典的な役割分担を見直そうということが問題になってきたわけです。その理由の1つは，勿論，女性解放運動の観点からです。女性が外へ出て働きたい，あるいは自分で何かをしたい。しかし，自分は結婚もしたいし，子供も産みたい。だから女としての産む性を持っている性も全うさせながら，プラス自分自身のしたいと思う生き方も実現させたいという，そういう時代に，女の人がすべてを背負いこまなければならない状況が今の家庭生活なわけですね。

それから，もう1つは社会習慣というものが一つの大きな壁としてたちふさがっていることに女性が気づいたことですね。だから，やはり自分が仮に働くということを自己実現として求めたいとすれば，子供も産み，仕事も一人前に出来て，何でもひきうけてやるということになると，女の人はよほど身体が丈夫で，かつ稀なる手早さと才能をもっていなければなりません。これはごく一部の選ばれた女の人しか，そのような自己実現はできないということになってしまうわけですね。

そのようなエリート層だけが可能である世の中ではしかたがないわけで，もっと数多くの女の人が，ごく普通の人たちが，それを求めた時に，誰に協力してもらうかといえば，とりあえず家庭の中で協同生活をしている夫であります。その人と家事を分ちあい，育児を分ちあう形の中で，仕事の部分，経済的な部分も分ちあう。そのような形が女の人の自己実現に必要なことではないかというところから始まったと思います。

定年が仮りに60歳に伸びた場合を考えますと，会社に

よって違うが，嘱託期間３年で63歳になりますね。それから再就職と何らかの形でやったとしても，男の人が社会的に活動するのは，せいぜい75歳位ではないでしょうか（ごく特殊な政治家とか経済界の長老といった方を除きまして）。

男の人が仮りに職業生活65歳位で家庭に退いた時に何もすることがない。私が家庭欄で読者の投稿を扱っていたころにこんなのがありました。『夫が働いている間は，日曜日など「オーイ朝めし，オーイお茶」とさけばれても，何となくハイハイという風にだしていましたが，定年になって，毎日家にいるようになって朝から晩まで「オーイめし，オーイお茶」といってるのを聞くと，今ごろ，何か胸の中がむらむらとしてくる』というのがありました。ここにまことにデリケートな夫婦の２人の時代の中での男と女のくらしようのあり方がわかってきて興味をもったのですが，

もし，男の人が地域社会に戻り，家庭生活に戻って，その時にすべて自分の妻にやってもらわなければならないようだとすると，それは粗大ゴミの運命になるしかないのではないかという気がいたします。

したがって，男の人がもっと豊かに生きるためには，ただ働くことだけでなく家庭内で妻の行なう仕事を分担することだと思います。育児を例にとれば，実際にやってみると，大変大きな喜びのある作業です。これは職場では絶対に得られない仕事で，私の夫などは育児にかかわりをもってくれなければ，私自身仕事を続けられませんでした。夫がしみじみ申したことは，もし自分が専業主婦と結婚していたならば，育児というこれだけ大変で，これだけすばらしいものであるということに気づかずに一生すごしたであろうといいましたが，それはごく平均的な男性の感想ではないかという気がいたします。

先程限界ということをいわれましたが，これは今私たちがめざそうとする婦人問題は，かつて婦人参政権の獲得とか，男と同じ賃金体系の獲得とか目にみえる形の上での獲得も実は大事なことですが，目にみえるだけに，かなり実現すればそれで全うできたという風に思ってしまうが，70年代からの運動は，私はやはり一種の女も含めた文化革命という側面をもっているのではないかと思います。

国際婦人年以降，これらの意識改革，少なくとも女の人と比較しての意識改革の速度は今や加速的であって，決して絶対に駄目ということではないのだという風に希望を持ちたいと思っております。

それから，先程私の著書のことをおききになりましたが，それは『女の子はつくられる』白石書店の発行です。

G氏：佐藤先生に２つほど質問いたします。１つは，お話の中に，特に30代40代の主婦が自分たちの生き方をその生きにくさをどうしたら再生させていくかということです。

私は専門学校に関係している者ですが，今日，パートタイム，フリータイムを含めて（自家営業もそうなんですが）専門学校にいかせる母親の気持としては，何か技術を身につけて，自分できり開けなかった生き方を子供に少しでも託すような，ですから，２年間という高い月謝をおさめているのは，自分で働いているお金で余裕をだして子供を学校にいかせている。そうした気持がわかるように，その子供も自分が40代のころは，おそらく子育てをしてでも，パートなりそのまま仕事を続けていくかも知れないということで殆んどの生徒が働いているという風に想像しています。

もう一つは，今の日本は外国とくらべますと30，40になって子育ても終り，老後自分で生きていくという時に，どうしてもう一度チャレンジできるような場が日本にはないのか，ということを非常にはがゆく思います。

中学生になって進路を決める時，自分はこういう方向に行きたい。先生のアドバイスは君の成績ではこの学校は無理ではないかといわれる。

先生の言葉としては，自分が決めて，将来どこへ行くか決めて高校へ行きなさいということで何かその辺が矛盾しているのではないか。例えば，コンピューターの数字では，あなたは販売の方がいいという。いろいろな方法で指導を受けますと，果して，子供がそれをはらいのけて，自分の進路を見つけていけるか。親がどの辺まで先生と話しあって進路を決めていったらいいかということについてお願いします。

佐藤：簡単に答えられる問題ではありませんが。現在30代40代の主婦の方がお嬢さんたちに，資格とか開ける姿という形でいっしょうけんめいになっておられること，まさにその通りだと思うのです。

ただ，その時に果して女の子を人間として扱かう。そうではなく，男の子と全く同じで性差なしで女の子も自立していけるように考えているかどうか，この辺のところを洗い直してみなければならないのではないかと思います。

と申しますのは，進路を決める時に，武川先生のお話にもありましたように，女のお子さんが大学や高等教育を選ぶ時に，本当に学部の片寄りはないのか，４年制と短大の片寄りはないのかということです。片寄りというのは女子は文学部や家政学部であったりというように，

それは悪いというのではなく，もっとバラエティがあって，その子の個性にあった生き方，その子がやりたい職業に結びついたような選び方をする，親としてこのように考えてもいいと思いますが，まだ選択に片寄りのみられるのは事実です。

短大にいくと資格がとれるということで，お嬢さんたちも，お母さんたちも勧めるそうですが，ただ資格だけで，本気になって何かをめざすといった時に，果してそれでよいものかであります。保母さんの仕事につく場合は短大で資格をとってという形が多いのですが，しかし本当にその人個人にとって充分かどうか。やっぱり女というのは，そういった風にとらわれていないかどうかということを，もう一度考えてみていただきたい問題だと思います。

そして，その反面，男の子に私はやっぱり親として家事能力をつけて下さったならば，女の問題というのはここでどれ位の年月を費やすよりは，男の子が体で覚える家事の力，将来やるかどうかは別として，体で動ける，私なんか男の子の料理の力というのを聞いて愕然とすることがあります。

最後に進路指導の問題にふれますと，子供本人がやりたいと思うことを，すでにもしその時にもっていたとしたならば，最終的には親が子供の側に立つしかないのではないかと月並みなお答えしかできませんが，私自身そうできればしたいなあと思っています。

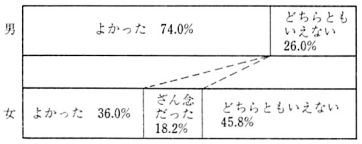
司会：ありがとうございました。他に質問ありませんでしょうか。まだ，沢山問題をお持ちの方もおられるかと思いますが，予定の時刻を10分以上もすぎましたので一応この辺で会を閉じさせていただきたいと思います。

長時間，諸先生方，お集まりの皆様最後まで熱心にご参加下さいましてまことにありがとうございました。

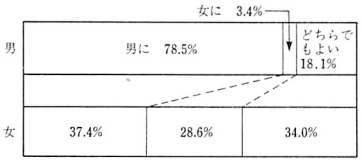
〔資料〕
小学６年生

東京都豊島区立文成小学校
武　川　行　男

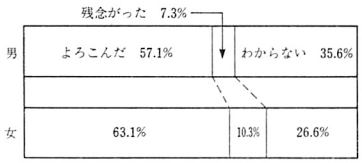
1．男に生まれて，女に生まれて（男177名　女203名）



2．生まれかわれるとしたら今度は，（男177名　女203名）



3．あなたが生まれたとき，家の人は，あなたが男であること，女であることを（男177名　女203名）



4．学校生活で，男だから，得，損（男177名　女203名）

	男子			女子	
得	1 男子は，いろいろなことが自由にできる。（スポーツ，遊び，いたずら，けんか，ことば使い……）。	23	得	1 重いものを運ばなくていい。	8
	2 男子の方がスポーツですぐれている。	11		2 スポーツがだめでも許される。	5
	3 トイレが便利。	6		3 叱られない，やさしくされる。	4
	4 スカートをはかなくていい。	4		3 歌が上手，声がきれい。	4
				3 おしゃれができる。（スカートはける，ドレス，髪型……）	4
損	1 力仕事をさせられる。	7	損	1 女子は自由にできない。活発にできない。	32
	2 男だからとがまんさせられる。	2		2 女子はいじいじしている。	16
	3 リーダーにさせられる。	2		3 月経がある。	15
	3 男の方がよく叱られる。	2		4 スポーツで女子は劣る。	13
				5 男子が優先。	7
				6 体重測定，恥かしい。	5
				7 暑いときシャツが脱げない。	4
				8 トイレがめんどう。	3

5．子どもの名前にみる親の子への期待，願い（文成小学校）

男子（329名）	一 41　彦 17　和 16　英 14　秀 12　樹 11　明 11　孝 11　二 10　健 10　正 10　裕 10	強く，たくましくという希望
女子（329名）	子 153　美 81　恵 21　紀 20　奈 15　由 14　代 11　理 11　智 9　里 8　香 8	美しく，やさしくという希望